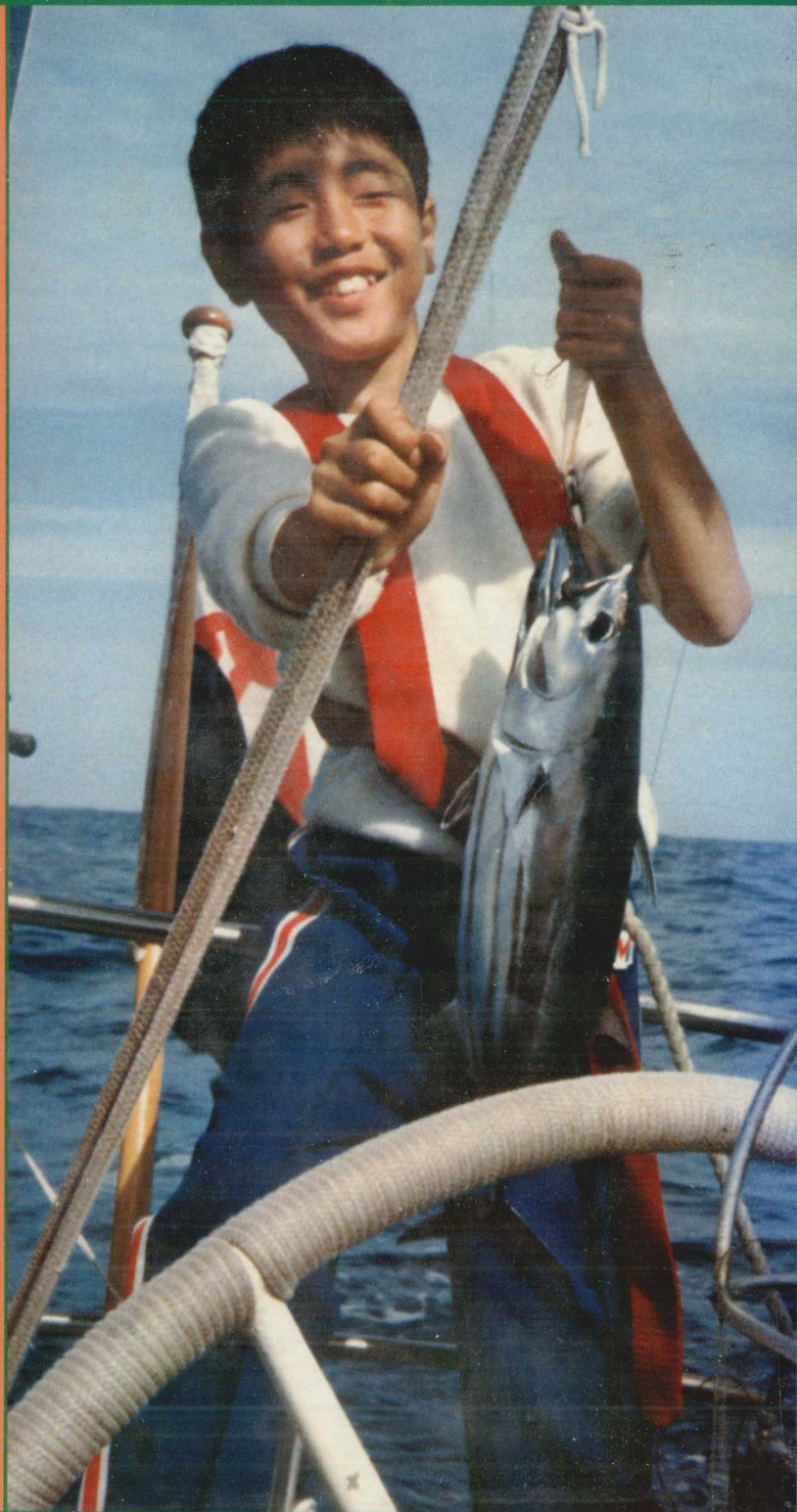


ぼくの太平洋大航海

岡本 篤

お父さんとヨットで太平洋横断 / 55日間の記録



講談社

お父さんとヨットで太平洋横断 / 55日間の記録

ぼくの太平洋大航海

岡本 篤



講談社

299

岡本篤

お父さんとヨットで太平洋横断！ 55日間の記録

ぼくの太平洋大航海

講談社 1980

174p 22cm

おかもと あつし

お父さんとヨットで太平洋横断！ 55日間の記録

ぼくの太平洋大航海

昭和55年3月1日 第1刷発行

昭和56年5月8日 第9刷発行

定価880円

著者 おかもとあつし 岡本篤

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣濟堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© 岡本篤 1980 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8026-194541-2253 (0)

(児一)

お父^{とう}さんとヨットで太平洋^{たいへいよう}横断^{おうだん}！ 55日^{にち}間^{かん}の記^き録^{ろく}

ぼくの太平洋^{たいへいよう}大航^{だいこう}海^{かい}

岡^{おか}本^{もと}
篤^{あつし}

もくじ

岡本篤くんの太平洋横断について……………	藤木高嶺 5
アルビレオ号の構造と名称……………	14
アルビレオ号の名まえの由来……………	16
航海日誌……………	岡本 篤 17
「天声人語」にしようかいされた篤くんの航海日誌……………	152
「アルビレオ号」の搭載品目録……………	154
●これだけのものを持つていきました……………	
航海を終わって……………	岡本卓也 159
海の友情に感謝する……………	174



(注)日付變更線を西から東にこえたため同じ日が二日あることになり、日記は五十六日めまでかぞえました。

■ 装 丁 熊沢正人

■ イラスト 加藤英夫

■ 編集協力 いたあぶる館

おかもとあつし
岡本篤くんの太平洋横断について

朝日新聞編集委員 藤木高嶺
探検家

夏休みに、お父さんと二人で、ヨットにのってアメリカへ……。なんとなく楽しんでます。しかし、航海というものは、ほんとうに楽しいものかどうか。それは、この岡本篤くんの航海日誌を読めばわかるはずですよ。

岡本くんは、大阪の東住吉区田辺小学校の六年生、昭和五十四年の夏休みを利用して、お父さんの岡本卓也さんと二人で、全長わずか九・五メートル、はば二・八メートル、一本マストのヨットにのって太平洋にのりだしました。ヨットの名まえは、アルビレオ号。この名まえは、星のすきな篤くんの希望で、北半球でいちばん美しいといわれる、白鳥座の二重星からとったものです。

ヨットによる太平洋単独横断に、最初に成功した人は、みなさんも知っている堀江謙一青年でした。昭和三十七年五月十二日、西宮のヨットハーバーを出て、九十四日の八月十二日、ぶじにサンフランシスコ湾につきました。堀江さんは、当時二十三さいで、のっていったヨットはマーメイド号(人魚)という、長さ五・八メートル、はば二メートルの小型ヨットでした。その後、ヨットも改良され、岡本くんたちの計画では、アルビレオ号は四十八日間ぐらいで、サンフランシスコにつくことができるのではないかと思われていましたが、実際は五十五日間もかかりました。最初、お父さんの岡本さんから、篤くんとヨットで太平洋横断の計画をうちあげられたのは、昭和五十四年の五月のことでした。それまで岡本さんとは、なんどもあったことはありましたが、とくに個人的に親しい間からではありませんでした。それより半年前の昭和五十三年十二月、岡本さん親子は、ほかのヨットなかまといっしょに、ヨットで和歌山県の由良港にきていました。堀江謙一、衞子夫妻が、マーメイド号で、南米、アルゼンチンのブエノスアイレスをめざして出発するのを見送るためでした。その日の海

は、かなりあれていましたが、岡本さん親子がのつたヨットは、紀伊水道のとちゅうまで伴走して見送りました。そのとき、わたしは、その少年、篤くんの氣じようぶさにおどろいたものでした。あらためて篤くんにあつたとき、氣の弱そうな、おとなしい少年にみえたので、わたしは半信半疑でした。岡本さんは、ヨット歴二十年で、外洋帆走の経験もゆたかですから、太平洋横断にはじゆうぶんな自信があるはずですが、なぜ小学校六年生のむすこをつれて、夏休みに太平洋横断の計画をたてたのか、わたしはその真意を知りたいと思いました。

岡本さんは、ゆっくりと間をおきながら、まるで哲学者のおもむきで、低い声で話してくれました。

「親しいヨットなかまの堀江謙一さんの行動力に敬服し、ひとりっ子のむすこを強い子に育てようと、二さいのときからヨットにのせてきました。この航海で子どもの夢と勇氣を育て、自主・独立の精神をうえつけることが目的です。そのためには、かわいそうでも、生死のぎりぎりの状態にまでつつこんで、きびしさを体験させるつもりで

す。ことしはおりよく国際児童年ですから、よい記念にもなります。」

また、篤くんは、

「とにかくがんばって、どれだけたえられるか、ためしてみよう。」

と、小さい声で話してくれました。わたしは、歴史的な航海だし、一生の思い出のためにも、どんなに苦しくても、毎日、日誌をつけるように、とすすめると、

「うん。」

と、力強くうなずいてくれました。

日本でも、いまや外洋ヨットの花ざかりです。日本は海洋国でありながら、外洋ヨットの歴史は浅く、つい最近までは、冒険ヨットに対しては鎖国状態であったことを考えると、まるでうそのような話です。このような時代をむかえるようになったわけには、堀江さんや、鹿島郁夫さん・牛島龍介さん・青木洋さん・栗原景太郎さんら、パイオニアとしてのヨットマンたちの、不屈の情熱があつたことをわすれてはなりません。

こうして日本の外洋ヨットは、おくれげながらも、七つの海に堂々と足をのびし

はじめ、もはやふつうの航海では、ニュースにならない時代となりました。時代の流れから考えて、当然のことだと思えます。

昭和五十年、沖繩国際海洋博協会主催の単独太平洋横断レースには、小林則子さんが、リブ号で参加し、女性単独ヨットの世界最長記録と、国際レース新の堂々たる記録をたてました。この壮挙は、ヨットが安全なのりものであるという考えを定着させる結果にもなり、家族ぐるみで世界一周とか、太平洋周航などをめざすグループがふえ、外洋ヨットの黄金時代をむかえることになりました。

そんななかで、岡本さん親子の太平洋横断が注目されたのは、けっして冒険ということからではありません。親子の断絶・肥満児・もやしっ子・過保護・虚弱児・情緒愛とむちの教育が、なんともさわやかな話題となったからです。

わたしは、アルビレオ号が洲本港を出発するとき、スイスのアルプスにいて、ざんねんながら見送れませんでした。それから、しごとの関係でカナダ北極圏からかえつ

た直後、枚方市の青年が、南米大陸六千五百キロの自転車横断に成功したニュースがとびこみ、つづいて岡本さん親子の太平洋横断成功のニュースが入りました。そして一週間後、やくそくの篤くんの航海日誌と、フィルム二十数本がとどきました。

手あかや海水・油でよごれたノート二さつ。開いてみておどろきました。一日も欠かさず、びっしりと書きつづられています。あの子にこんなことができるのか、とあらためて感心しました。ヨットがてんぷくしたとき、宿題のプリント、約五十まいが波にさらわれたといいます。この日誌だけは、必死になっておさえたのでしよう。しみだらけで、あちこち字がにじんでいる。なみだ・おそれ・苦しみ・喜びにあふれるこの日誌は、篤くんひとりの記録にとどまらず、世の青少年たちに、広く勇氣と冒険心と自立心を育てるのに役だつでしょうし、そうあつてほしい、と願うものです。

中学二年生だった昭和五十二年の夏、父親とヨットマンの三人で、大西洋を横断した石浜紅子さんは、

「小学校六年生といったら、中学の入試をひかえてたいへんなときなのに、太平洋横

断をしたときいて、わあっ、やった！　と思いました。わたしのときは、父以外にもう一人おられたので、岡本さんが親子二人つきりと知って、たいへんうらやましく思いました。というのは、篤くんもお父さんのことを、いろいろと理解できるし、お父さんも子どもさんと、じっくり話しあう機会をもたれたらどうからです。篤くんが、毎日、しけの日でもノートにびっしり日誌を書いたと聞き、まさにおどろき、尊敬します。」

とっています。

やがて、岡本さん親子は、サンフランシスコから空路帰国しました。四か月ぶりの再会でしたが、篤くんの態度の変化に、わたしは目をみはりました。以前のように、うつむきかげんの消極的なしせいとうってかわって、堂々とむねをはり、はきはきと話しました。困難と危険をのりこえてやりとげた、という体験と自信が、少年をひとまわり大きくしたのだと思います。

この航海では、父と子は対等のあいぼうとしてつきあい、交代でかじをとり、しけに



て手あかでまっ黒になった、^{おかもと}岡本くんの^{こうかいにっし}航海日誌。

もたえてきました。お父さんは、

「これから、かれを一人まえの独立した人間としてあつかいます。じつは、そのための航海だったのです。」

と断言しました。

わたしがもつともむねをうたれたのは、サンフランシスコについたとき、篤くんが、「お父さん、ありがとう。」

といったことです。このひとことが、この大航海のすべてをものがたっていると思っただけです。

アルビレオ号の構造と名称

